

2013. 02. 18 柏崎正憲

派遣先

マールブルク大学（ドイツ）

派遣期間

2012年3月28日から2013年1月18日まで

派遣の概要

2012年夏学期および2012/13年冬学期の二学期間、マールブルク大学にて、ニコス・プーランザスの国家理論のドイツにおける再評価の動向を、また2010年から続く欧州危機にたいする批判的な諸研究を調査した。当初の研究計画は、「グローバル化分析や新自由主義批判の文脈で、プーランザスの国家理論がいかなるアクチュアリティをもっているのかを解明し、国家とグローバル化の関係にかんする諸研究に新たな視点や方法を提供すること」であった。「プーランザスの国家理論がいかなるアクチュアリティをもっているのか」の点については、当初の期待以上のことを調査できたと考える。「国家とグローバル化の関係にかんする諸研究にあらたな視点や方法を提供すること」という点については、報告者の今後の課題となるが、その準備作業となる論文を、2012年9月末に東京外国語大学海外事情研究所紀要『クアドランテ』に投稿し、採用された（2013年春刊行予定）。くわえて、報告者が派遣前に提出し学位を得た博士論文を、改稿のうえ書籍化することが、派遣前の段階で決まっていたが、この書籍にも、本派遣の成果が反映される（2013年夏から秋に刊行予定）。

研究成果及び今後の課題

2012年夏学期には、欧州危機にかんする集中ゼミナールがマールブルク大学で6月に開催された。報告者はこれに参加し、欧州危機の最新の諸研究の調査に役立てた。並行して、ニコス・プーランザスの国家理論のドイツにおける再評価の動向の調査も、独自に進めた。判明したのは、プーランザスの理論が、とくに欧州統合および今日の欧州危機の批判的研究において、積極的に応用されていることである。かれの国家理論が国民国家のみならず、国際的あるいはリージョナルな制度や政治秩序にかんする説明力をも有していることが、実際の分析をつうじて証明されているのである。プーランザスの視点から研究するとき、EUは主権的・国民的国家の勢力均衡の反映でも、しかしリージョナルな上位国家でもなく、むしろ国際化する国家のネットワークとして把握される。

8月から9月の夏休み期間には、夏学期の調査をもとにして、英語およびドイツ語における欧州危機の最近の批判的研究を参照しつつ、欧州統合のトータルな過程に内在する構造的矛盾に焦点を当てた論文「埋め込まれた帝国間対立 欧州統合におけるヘゲモニーと国家性の研究」を執筆し、東京外国語大学海外事情研究所紀要『クアドランテ』最新号に投稿した。同論文は査読のうえ掲載が決定している。『クアドランテ』最新号は2013年春に刊行予定である。

マールブルク大学での受入教員になっていただいたジョン・カナンクラム教授（John Kannankulam）は、ニコス・プーランザスの国家理論をグローバルな新自由主義政策の分析や欧州統合の批判的研究に応用しており、とくに欧州統合という主題については研究グループを中心に組織している、報告者の分野においては先駆的な研究者である。彼は2012/13年冬学期に、欧州統合および欧州危機にかんする二つのゼミナールをもっていたので、冬学期にはこれに参加した。9月に『クアドランテ』に提出した論文は、掲載許可のうえ改筆の余地が与えられたので、カナンクラム教授のゼミで紹介された諸研究も、この論文に最終的に反映することができた。またカナンクラム教授には、4月からほぼ月一度のペースで、報告者との面談の機会を設定し、報告者の研究にかんする質問や相談を受けていただいた。夏学期のあいだには、英語で報告原稿を作り、英語で質問や意見交換をしたが、冬学期には、ドイツ語で報告や意見交換を行うことができた。面談のさいにはコメントだけではなく、カナンクラム教授の準備中の原稿なども見せていただき、報告者にとって大いに参考になった。

冬学期には、欧州統合にかんする研究に並行して、報告者が派遣前に提出し学位を得た博士論文『社会的敵対性と国家 プーランザスにおける政治的なものの位相論』（2012年3月博士号取得）の改稿に着手した。これは2013年夏から秋のあいだに書籍として、吉田書店（東京）より刊行することが、派遣前の段階で決まっている。本派遣の成果を反映して、大幅な改稿が必要となっているが、10月から翌年1月までのあいだに、全体の5分の4は完了した。派遣終了後も残りの改稿を進めており、ほぼ当初の計画どおりの時期に刊行できそうである。この改稿にかんして、日本語の文献にも当たりなおす必要から、報告者は当初の派遣期間を一ヶ月弱短縮した（2月14日から1月18日へ）。カナンクラム教授が冬学期の残りの期間にゼミで取り上げる文献については、あらかじめマールブルクにいるあいだに受け取ることができたので、派遣期間の短縮による当初の研究計画が大幅に変わることはなかった。

副次的な活動としては、中東の民族問題にかんする学生の討論サークル（der interdisziplinäre Diskussionskreis zur kurdischen Frage）に参加した。6月27日には、日本のクルド難民についての報告をドイツ語で行った（発表原稿の校正においては友人の助けを得た）。また語学力の向上のために、5月より、オンラインでのタンデム（言語交換）を、週に一、二度のペースで行った（マールブルクでは日本語のタンデムを希望するドイツ語話者が見つからなかったため）。

今後の課題

プーランザス国家理論の非ナショナルな政治秩序への応用は、EUの研究において大きな成果

をもたらしていることが、本派遣をつうじて明らかになった。そのような研究が他のリージョナルな単位（東北アジア、環太平洋、東南アジア、等々）にも応用されうるのか、されうるとしたらいかにしてか。そういった問題は、報告者が今後に取り組んでいくべき問題である。

今後における研究成果の発表については、当面は、上述の博士論文の改稿・書籍化を最後まで進めることが課題である。また、報告者は東京外国語大学大学院での研究を本年度で終えるが、2013年4月からは、早稲田大学人間環境学部の政治学講師（非常勤）に着任することが、さしあたり決まっている。教場でも、また学会誌などでも、本派遣の成果を継続的に発表し、また発展させていきたい。